

## 地中海という言葉についての一考察

竹内啓一

あまり知られてもいないし、また学界で問題になったという話も聞かないが、ポルトガルの地理学者オルランド・リベイロが一九六八年に「地中海・環境と伝統」という本を書いている。その内容は、「地中海地域」の特色を、その地域的多様性にもかかわらず、歴史的に形成された普遍性、景観の統一性というヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユの伝統(3)のみの用語で論じたもので、ブローデルの二番煎といわれても致し方ない、たしかにそれほど問題にすべき書物でないかもしれない。ただ、ひとつ注目に値するのは、本書において、著者が、地中海地域の人間として書く、したがって、北西ヨーロッパやアメリカの人たちにとってエキゾチックなものも自分にとっては身近なものであるとのべて、この点で、地理学者の名前をあげるだけでもリッター、フリップソン、ヴィダール・ドゥ・ラ・ブラーシユ、シオン、シーグフリードなどによって書かれたものとの違いを自負していることである。何々地域という言葉が用いられることは多いが、それが、分布の範囲や等質性、あるいは機能的結びつきによって、第三者が認識する空間、いわば操作概念とし

ての「地域」を意味する場合と、その「何々」を構成する、または「何々」を担う人口の帰属意識をも伴う「地域」を意味する場合とは、「地域」が異なった次元で理解されているわけであり、従来、地中海地域という場合、それはもっぱら第一の次元、すなわち操作概念の次元で理解されてきた。したがって、かぎられた知識人によるものであれ、「地中海の人間によるエッセー」という意識は、もし、真当にそのような内容のものであれば少し大袈裟な言い方をすれば新しい知的状況を示しているのである。

しかし、リベイロは、結局のところ、普遍的乃至一般的な地中海人の立場を新たにうちだしたわけではない。ポルトガルという、地勢から見れば地中海地域に属さない国土の人間が、文化的・歴史的には地中海世界に属するのだという信仰告白に、むしろこの書物の独自性があり、その点では期待はずれ、または失敗作であると言えるかもしれないが、そもそも「地中海」の主張は、地中海地域内の各地方で、その地方が持つもうひとつの非地中海的な顔に対する反抗乃至違和感としてなされるのが常なのであった。北、東または南にひろがる大陸の奥に起源する非地中海的要素への対応として生じる地中海の地域意識は、したがって、普遍的な地中海世界への帰属意識としてあらわれるよりも、むしろ、ひとつの国、ひとつの文化のなかにおける地方主義のかたちをとるとする仮説をここで立てることが許されよう。そしてリベイロの場合、それが、大西洋岸文明に対するポルトガルの地中海的・地方主義であるという点に特色があっ

たのである。しかし、その地中海主義は、マツレブの地中海主義とも、レヴァン諸国の地中海主義とも容易には共鳴しない。いや、イベリア半島の大西洋岸からの地中海への憧憬は、フランスのミディのロマンティシズムやプロヴァンスの地方主義とも異質であろう。フランスの場合、地方主義としての地中海主義も、近代フランス国民国家の政治的・経済的・文化的中央集権体制の存在と対蹠をなしているのである。

(1) Ribeiro, Orlando: *Mediterrâneo, Ambiente e tradição*. Lisboa 1968

(2) リンネイロは、現在ポルトガル地理学界で、色々な意味で大きな権威をもっているようであるが、彼の方法論をまとめた Ribeiro, O.: *Atitude e explicação em geografia humana*. Porto 1960 には、ヴィダールの生態学的地理学の影響が強くみられる。do: En relisant Vidal de la Blache. *Annales de Géographie* vol. 77 1968 pp. 641-662 では、ヴィダールの動態的景觀論の有効性が高く評価されている。

(3) Brandel, F.: *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*. Paris 1949 (Seconde édition 1966) の「環境の役割」と題された第一部は、de Planhol, X. や Claval, P. など現代のフランス地理学者によって、ヴィダールの学派（古典的または正統的なフランス地理学派）の方法を最も良く駆使して地中海地域の個性を記述した傑作という評価が与えられている。(Claval, P.:

*Essai sur l'évolution de la géographie humaine*. Paris 1964 p. 64 以下) do: *La pensée géographique. Introduction à son histoire*. Paris. 1972 p. 49)

地中海地域への帰属意識は、地中海地域をモザイク状に構成する諸単位の枠内での地方主義の主張としてまずあらわれるという仮説を証明するためには、事例を丹念につみあげて検討しなければならぬが、ここでは、地中海地域という言葉の利用に伴う問題点の指摘をかねて、イタリアにおける事例を吟味することにする。シチリアのパレルモ大学の経済学者フリゼッラ・ヴェッラが一九六六年に発表した「イタリア南部問題における歴史と経済」という書物は「地中海の没落から第一次および第二次産業革命まで」という示唆にとむサブタイトルをかかげているが、著者の序文によると、この本は、もともと一九三三年に、やや違った題名でカタニアで出版されたが、ファシスト政府によって発禁処分をうけて押収されてしまったとのことである。この著者の基本的立場は、いわゆる「南部問題」の形成の直接的契機を、イタリア統一以来の統一政府の政策に求め、南部の復権を主張するという南部主義者のそれであるが、一九三三年という、ブローデルの書物が発表されるのよりずっと前の時点において、地中海貿易の没落、大西洋重商主義の勝利を、北西ヨーロッパにおける産業革命の進行とならんで、南部問題発生の基本的歴史的原因としてあげていたことには注目しなければならない。プリゼッラ・ヴェッラに対して、われわ

それは、シチリア——彼にとつて、イタリア南部とは、まず、彼の出身地シチリアであるから——が、地中海交易にどれだけの役割をはたしていたかが明らかにされていない。地中海勢力と大西洋勢力との覇権の交代という場合、イベリア半島勢力と北西ヨーロッパ勢力との関係についての分析がないなどの諸点に關して、現在までの歴史学の研究成果の上に立って、容易に批判を展開することができる。しかし、ここで重要なのは、イタリア南部の没落、停滞を地中海世界のそれと同一視する彼の論理の強引さそのものであり、また、そのことと關連して地中海地域なる概念を、風土論の意味あいにおいてでなく、まったく歴史的・文化的コンテクストにおいて理解している点である。

イタリアという近代国家の内部における地域問題の提起、したがって国内における地方主義が、地中海文明の復権の主張という形をとるのは、ニチエフオロ<sup>(8)</sup>など、すでに前世紀末葉の南部主義者<sup>(9)</sup>においても見られたことであつた。フリゼッタ・ヴェッラは、地中海文明、地中海世界が意味をもつようになった歴史的契機を明らかにしながら、その「地中海」の主張を展開したところに独自性があるし、同時に、その「地中海」なるものが、空間的にどこを意味するかという点に關しては無頓着である、というよりも、イタリア南部に地中海的要素を発見しようとするとき、そんなことはどうでもよいという点で、やはり強引な論理なのである。アラブ世界のどこかで、「地中海」の主張がなされたとしても、その主張との交点がはたしてあるか、どうかなどという第三者的立場からの関心はそこにはない。地

域への帰属意識、そして「地中海」の場合は地方主義から出発しない。「地中海地域」あるいは「地中海世界」という概念を外から眺めて構築しようとするときには、これと違って、たとえ十六世紀後半における転換という歴史的契機に注目した上であつても、まず線で「地中海」なる空間を区画しようとする。しかも地中海という言葉が、地中海盆地、地中海式気候という地勢、気候(景觀における表現としては植生)によってはっきりと区劃される自然地域をも意味しているために、これら自然地域との關係に注目した風土論的「地中海」の理解がなされることが多い。なかでも、「地中海式気候」→「一年生作物の夏における栽培不可能」→「農業革命の欠如」という図式は、「地中海」と「北西ヨーロッパ」との地位の歴史における逆転を説明する文明論から、グラムシがリソルジメントの性格規定に用いた *mancata rivoluzione agraria* と、いう表現を *mancata rivoluzione agricola* にすりかえる生産力主義にいたるまで、さまざまなヴァーシオンを伴いつつしばしば説かれていたのであるが、フリゼッタ・ヴェッラが「地中海」農業の後進性について論じるとき、この種の風土論とはまったく無縁である。地方主義としての地中海主義が、地理的宿命論を許す風土論の説明に反撥するのは当然のことである。そして、彼の場合、地中海式気候のもとにあつても、北西ヨーロッパとは異なる形において、すなわち果樹栽培と灌漑農業の発展という形で、農業革命の可能性を示した点において、この反撥は根柢のあるものであつた。おなじことはファシスト政府に抵抗してその大学の職をお

われることになった、イタリアではおそらく唯一の地理学者マ  
ラネッリ<sup>(11)</sup>についても言えることである。

(4) Frisella Vella, G.: *Storia ed economia nella questione meridionale italiana. Dalla caduta del Mare Mediterraneo alla prima e alla seconda rivoluzione industriale*. Milano 1966

(5) 一九三三年の初版がファシスト政府によって発売禁止処分をうけた理由は、著者によって明示されていない。ニッテイ (E. Nitti) の研究などによりながら、国家権力機構を媒介しての北部イタリアによる南部イタリアの収奪と、いうことを告発した論旨が当局の気にいらなかったのではないかと想像される。

(6) 彼のイタリア語で書かれた書物は発禁になったが、彼のこの「地中海主義」は第二次大戦前、すでにいくつかの論文のかたちで発表されていたし、一九三七年にフランスで Frisella Vella, G.: *La fonction méditerranéenne de la Sicile. Phalange* 1937 pp. 239-250 と同じ発表もあつた。この老経済学者は、その後も、変ることなく、大西洋重商主義による地中海経済の植民地化と、このテーゼを展開している。筆者の知るかぎり、最も新しいものは次の文献である。Frisella Vella, G.: *Origines et réalité de la dépression en Italie méridionale. Economie Appliquée* 24 1971 pp. 175-186

(7) Niceforo, A.: *L'Italia barbara contemporanea*. Palermo 1898

mo 1898

(8) この南部主義者 meridionalista と云うのは Villari, P., Franchetti, L., Sonnino, S., など、の北部や中部出身の論者による問題の提起を継承して、統一イタリアの中央政府、国家機構に対する異議申し立てを、一八九〇年以降するようになった南部出身の知識人グループのことである。

(9) 自然地域としての地中海地域の定義は、イスナールの近著 Isnard, H.: *Pays et paysages méditerranéens*. Paris 1973 pp. 9-20 に簡潔になされているので、ここではくりかえさない。

(10) Frisella Vella, G.: *op. cit.* 1966 の第四部においては、果樹栽培と灌漑農業発展の方向でシチリア農業の集約化の可能性がのべられ、ドライ・ファームिंगによる小麦栽培が残存したのは、ひとえに寄生地主制に由来するものであることが指摘されている。またマーフニアについて論じた論文 Frisella Vella, G.: *La mafia sicilienne, aspects économiques et sociaux. Economie Appliquée* 24 1971 pp. 227-237 においては、議論をさらに進めて、「生産諸要素の効果的結びつきの実現」を妨げたガネロット (Gabelleto) の役割が論じられている。

(11) マラネッリの所論については以前にややくわしくのべたことがあるので、ここでは論じない。(拙稿「イタリアにおける『南部問題』の起源と問題の展開——イタリア南

部問題研究のための序説——『経済地理学年報』第七卷

一九六一年 三九—五五頁) 現代のイタリア地理学者ガン  
ビは、最近、十五年前に筆者がおこなったのとおなじ観点  
からマラネッリの再評価をおこなっている。(Gambi, L.:  
Esquisse d'une histoire de la géographie en Italie.

Travaux de géographie fondamentale. Paris 1974 pp. 9-

39

自然地域としての「地中海」が、文化にとって何の意味も持  
たない、換言すれば、自然地域としての「地中海」を説明する  
文化のチームは皆無であるというのでは正常人の常識に反する。  
また、風土論的宿命論に反撥する地方主義者にとっても、いや、  
地方主義者であるからこそ、自然との関わりあいのなかで形成  
したと実感される文化は、風土として、いかにも実在する、意  
味を持つものと了解されるのである。

しかし、そのような「風土」の空間的な具体的なひろがり、  
その範囲を画定しようとする、地中海固有の「風土」を見出  
すのは決して容易でない。民族の移動、異文化の接触の長い歴  
史を考えれば、これは当然のことである。たとえば、ブドウの  
栽培植物化は、異説もあるが、通説では地中海地域でなされた  
と考えられているが、周知のように中世にはアルプスのはるか  
北の方にまでブドウ栽培がひろがってしまった。オリーブは、  
たしかに、生物気候としての地中海式気候の指標そのものでは  
あるが、その生育のための乾燥限界、高度限界、北の温度限界の

ところらまで、栽培が拡大したのは十九世紀以降、オリーブ油  
が非地中海地域にさかんに輸出されるようになってからである  
こと、すなわち、生物学的な栽培限界と、実際の経済学的な最  
劣等地限界とは一致しないという当然のことをここで想起する  
必要があろう。オリーブ栽培よりも、オリーブ油の使用の方が  
良い指標になるのも、どちらかと言えば、地中海の北岸、ヨー  
ロッパ側においてであって、アラブ世界では、伝統的にも動物  
の体が主要な脂肪源になっている場合が多い。また、地中海ヨ  
ーロッパにおいても、地中海人が、バターを食する連中を野蠻  
人として軽蔑していたのは、古典古代のことであって、チェー  
トン系諸族の影響をうけて、中世には、地中海世界においても、  
バター、チーズがオリーブ油とならんで重要な栄養源になって  
いたのである。

建築材料、建築様式、都市や集落の形態に関しては、どれだ  
けのものを地中海世界が、オリエントなどから継承したか、ま  
た、ヨーロッパ文明の形成に、それがどこまで影響を与えたか  
ということを確認するのは、非常に困難である。また、ヨーロ  
ッパ人によって書かれた建築史などの書物で、地中海精神と呼  
ばれるものが、その実ヨーロッパ的バイアスに富んだものであ  
ることにも注意しなければならぬ。作物や建築、集落は、大  
地と一体をなして景觀をかたちづくるが故に、恣意的で無責任  
な風土論の恰好の材料になり易いのである。

社会の基本的な生産活動、生存にとって不可欠な衣食住の消  
費活動においては、人間社会、人類文化に普遍的な原理が貫徹

しているのみでなく、時間の経過とともに空間的個別性の消滅、効率と便益の最大化を求めての一般化が進むことが多いのではなからうか。これに対して、社会的剰余の蓄積は個人のものであれ、地域のものであれ、個別的、個性的なものを、その循環過程において実現せしめるのではないだろうか。風土論が有効性を發揮するのは、社会的剰余を蓄積する限られた階層の生活においてではないだろうか。このようなことを考えさせるのが、ドゥ・プラノールの、雪または氷の交易に関する研究<sup>(13)</sup>である。ドゥ・プラノールによれば、地中海地域および中東は、山地において、冬季、多量の積雪があり、この残雪を、夏季、比較的近距離の都市にシャーベットまたは氷水用に出荷することができたという点で特殊な条件を備えていた。これに対して、熱帯においては、天然の残雪または氷河があまりに遠かったために、雪や氷を利用することがほとんどなく、また、大陸西岸や東岸の温帯においては、遠距離輸送をするか、大変手間をかけて、冬季に氷室に水を仕入れて夏まで保存しなければならず、費用の点から、極めて限られた階層の需要しかなかったし、また比較的はやく衰退したというのである。このドゥ・プラノールの説明は、たしかに、地中海式気候と、第三紀造山帯に属する険しい山地という風土条件を見事に言い表している。イタリヤから伝えられたアイスクリームは、十七世紀バリの貴族社会で大いに流行したが、そのとき繁盛したのは、消費地に近い氷室業者であって、地中海地域におけるように、山から消費地に、夜間大急ぎで水を運ぶ運送業者ではなかったのである。

(12) Tamahiti, R.: Food in History. London 1973 pp. 93-112. その他、食生活の歴史については、タンナヒットの書物に多く負っている。

(13) de Planhol, X. は、一九七〇年代になつてから、雪または氷の交易に関する一連の論文を発表している。その一つが、de Planhol, X.: L'ancien commerce de la neige en Corse: neige d'Ajaccio et neige de Bastia. *Mediterranée* 1968 pp. 5-22.: Réference sur le commerce de la neige en Afrique du Nord. *Maghreb et Sahara. Etudes géographiques offertes à Jean Despois*. Paris 1973 pp. 321-323.: Lineamenti generali del commercio della neve nel Mediterraneo e nel Medio Oriente. *Bollettino della Società Geografica Italiana* 1973 pp. 315-339: Le commerce de la neige en Afghanistan. *Revue de Géographie Alpine* 1974 最後のヌルノーブルの雑誌の論文を、筆者は未見である。雪の交易に注目した地理学者は、シュ・プランホルが最初ではなかつ、Spano, B.: Niviere e precipitazioni nevose nel Salento. *Rivista Geografica Italiana* 1963 pp. 177-209, Barceló Pons, B.: El comercio de nieve en Mallorca. *Boletín de la Cámara Oficial de Comercio, Industria y Navegación de Palma de Mallorca* LIV. 623. 1959 pp. 46-51 〇 44 年先駆的な研究がある。地理学者以外に、Watson, R. A.: The Snow Sellers of Man-galat, Iran. *Anthropos* 1964 pp. 904-910 〇 44 年研究

がある。

(14) 貯水の方法、用途がわが国の氷室とおなじなので、*ice-house* その他各地でさまざまな名称で呼ばれていたが氷室という訳語をあてておく。氷室については、『日本書紀』「仁徳六二年」に言及があり、『千載和歌集』でも、「春秋も後のかたみはなきものをひむろぞ冬のなごりなりける」(覚性法親王)とうたわれていて、貴族・上流社会の夏の利用のために、わが国でも古代から貯水のおこなわれていたことが知られる。

雪の交易は、ひとつの例である。需要がなければ成り立ちえないという点、および、それ自体ひとつの文化であり、自然条件の必然的帰結では勿論ない<sup>(15)</sup>という点では、オリヴ栽培と同様であるが、気候条件と地形条件とをあわせて反映しているという点で、雪の交易のほうが、「地中海」の風土においてしかありえない文化指標としてすぐれている。そのような指標は、その他にも、沢山見出すことができよう。しかし、そのような指標が、風土論的解釈を可能にするのは、ここで雪の交易について吟味したような多くの限定条件のもとにおいてのみであることも、充分予想されることなのである。

沢山の地中海主義が、「地中海」の各地で、地方主義として

主張されている。それらが、ひとしく「地中海」という言葉を用いる基礎には、歴史的に形成された地中海世界というものが存在する。歴史的形成としての地中海世界の吟味は、本稿の課題とするところではないが、当然のことながら、そこにおいては、海を囲む陸地と海に浮ぶ島という地勢が意味を持ったことを否定するものではない。しかし、それらの地方主義が愛着する地中海の風土なるものは、「住めば都」式の心理に由来する慣性が共同幻想としては存在しても、操作概念としての地域の設定には、非常に限られた範囲でしか役立たない。それぞれの地中海地方主義の内容は、それらが抵抗し、違和感、敵対観をいだく対象物に、それぞれ、より強く規定されているのである。

(15) おなじ地中海地域に移動してきて定住化した遊牧民でありながら、トルコ系種族が山から運ばれてきた雪をさかんに利用しているのに対して、アラブ系の種族では、その利用が非常に限られていることを、ドック・プラノールは指摘している。(de Planhol, X.: op. cit. *Boletino della Societa Geografica Italiana* 1973)

(一橋大学教授)

\* 本稿は昭和五十一年度科学研究費補助金(総合研究(A)課題番号一三九〇一〇)による研究成果の一部である。